

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：62601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K02603

研究課題名(和文) 道德教育カリキュラムの内容構成に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Basic research on the contents of moral education curriculum

研究代表者

西野 真由美 (NISHINO, Mayumi)

国立教育政策研究所・教育課程研究センター基礎研究部・総括研究官

研究者番号：40218178

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：学校における道德教育カリキュラムについて、学習指導要領に示された「内容」とその示し方の見直しに向け、現代のカリキュラム理論や徳倫理学の知見を踏まえて、実践的知性の育成を柱とする概念基盤型のカリキュラム開発の可能性を検討するとともに、各学校における内容の重点化に係る実態を分析し、学校主体のカリキュラム開発を充実するための内容の示し方に関する課題を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学校における道德教育の内容は、学習指導要領で道德的諸価値として示されている。1958年に道德の時間が教育課程上に位置付けられて以降、道德が特別教科化された現行学習指導要領に至るまで、これらの内容に対する抜本的な見直しはほとんどなされてこなかった。この間、一連の内容選択や構成の根拠に係る理論的検討もほとんどなされていない。本研究では、最新のカリキュラム研究や徳倫理学の成果や諸外国の道德教育カリキュラムの改革動向を踏まえ、現行の内容構成の問題点を明らかにするとともに、理論的根拠に基づく内容構成の示し方を検討し、今後の学習指導要領改訂に向けた選択肢を提案した。

研究成果の概要(英文)：We analyzed the "contents" of moral education stipulated in the national curriculum guidelines to identify the issues necessary for the revision of the curriculum. Due to the restriction of the empirical research at home and abroad under the worldwide spread of the COVID-19, we focused mainly on theoretical analysis on latest findings of curriculum studies and virtue ethics. First, we examined the possibility of developing a concept-based curriculum based on modern curriculum theory. Second, based on the recent research trends in virtue ethics, we explored the ideal content structure centered on the development of practical intelligence. In addition, we analyzed the actual situation of priority decision of the contents of moral education in each school and clarified the issues to enhance the school-based curriculum development for moral education.

研究分野：道德教育

キーワード：道德教育 カリキュラム開発

## 1. 研究開始当初の背景

小・中学校における道徳教育は、「特別の教科道徳」の導入(小学校は2018年度から、中学校は2019年度から)に向けて作成された学習指導要領により、目標や学習・指導方法、評価に関する抜本的な改訂がなされた。いわゆる「考える道徳、議論する道徳への転換」(「学習指導要領解説」)である。この改訂では、問題解決的な学習など質の高い多様な指導法の活用が推奨され、指導法の質的転換が目指されたが、「内容」については、部分的修正に留まった。

これは現行の内容構成が是とされたからではない。事実、2013年に道徳の教科化の検討に着手した「道徳教育の充実に関する懇談会」(文部科学省)では、「内容」に関わる問題点が議論され、「改善の方向」として、「児童生徒の発達の段階や児童生徒を取り巻く環境の変化などに照らし過不足はないか、児童生徒の日常生活や将来にとって真に意義のあるものとなっているかなどについてあらためて必要な見直しを行い、学習指導要領を改訂する必要がある」(道徳教育の充実に関する懇談会「今後の道徳教育の改善・充実方策について(報告)」(2013年12月26日))と指摘され、内容の精選、発達段階ごとに重視すべき内容や共通に指導すべき内容の明確化、今後の社会において特に重要と考えられる内容の示し方など、具体的な検討課題が挙げられている。しかし、この報告を受けて実施された中央教育審議会の審議では、内容構成の改善案として「共有価値(Shared Values)」や「中核価値(Core Values)を学習指導要領上に示す可能性が検討はされたものの、具体的な見直しは着手されないままとなった。

一連の審議において内容構成に関する検討が十分になされなかった理由は、学習指導要領の「内容」が、特設道徳の成立(1958年)以降、今日までほぼ継承され、内容選択・配列の原理に関する研究が殆どなされないまま、部分修正での対応が続いてきたからである。

他方、諸外国の道徳教育カリキュラムに目を向けると、1980年代以降、道徳教育で教える「共有価値」の構築や「中核価値」の構造化に関する様々な取組が展開されている。さらに21世紀以降、コンピテンシー・ベースの教育課程改革の世界的潮流の中で、「レジリエンス(折れない心)」や「グリット(やり抜く力)」などの非認知的能力と学力との関係に着目した研究が進み、非認知能力を道徳教育の「内容」に位置付けたカリキュラム開発も行われるようになってきている。

1958年版学習指導要領以降、抜本の見直しが行われていない我が国道徳教育の内容について、最新の研究成果を活用して内容構成原理を再構築するカリキュラム研究を充実していくことは、次期学習指導要領改訂に向けた重要な検討課題といえよう。

## 2. 研究の目的

本研究課題の核心となる問いは、「学校における道徳教育カリキュラムの内容構成と配列はどうか」である。この問いは、学習指導要領に示された道徳教育の「内容」を現代の道徳教育理論および今日の社会的要請・文化的背景を踏まえて再構成する理論研究と、各学校における創意工夫ある道徳教育を実現するために「重点内容」の選択と配列に関わるカリキュラム・マネジメントをどう進めていくかを検討する実践研究の二つの柱で構成される。

この問題意識の下、本研究では、学校における道徳教育カリキュラムの内容について、学習指導要領に示された「内容」の見直しと構造化に向け、内容構成を理論的・実証的に検討し、次期学習指導要領改訂における「内容」の見直しに必要な基礎資料と理論的根拠に基づく内容構成の選択肢を提供することを目指す。この目的を達するため、道徳教育の内容構成に関する理論的研究(道徳哲学・カリキュラム研究的視点)、戦前・戦後を通じた、我が国の道徳教育におけ

る内容構成に関する研究の総括（教育史的視点） 諸外国の道德教育カリキュラムにおける内容構成の動向調査（比較教育的視点） 道德教育のカリキュラム・マネジメントに関する国内小・中学校の実態調査ならびに先進校における研究開発の現状分析（実践的視点）を行う。

### 3. 研究の方法

研究目的を達成するため、本研究では、次の三つの視点で課題を遂行する。

#### (1) 道德教育カリキュラムの内容構成原理に関する理論・文献研究

我が国の道德教育史における内容構成の変遷とその背景分析

戦前・戦後を通じた道德教育の内容構成の変遷をまとめ、改訂時期にどのような議論や検討がなされたかなど変遷の背景を文献調査により明らかにする。

徳倫理学及び道德性発達論の研究動向に基づく内容構成の開発

学校における道德教育に理論的根拠を提供しうる二つの学問 - 徳倫理学と道德性発達論 - の最新の研究動向に基づき、内容構成の根拠となる原理を検討する。

#### (2) 道德教育カリキュラムの内容構成とその開発プロセスに関する国際比較

直近の10年間に「共有価値」や非認知能力の育成を取り入れた道德教育カリキュラムが開発された諸外国の動向を調査し、それらに共通する枠組みを整理する。

#### (3) 学校における道德教育のカリキュラム・マネジメントに関する実践的研究

文部科学省研究開発学校など道德教育に関する独自の教育課程開発に先進的に取り組んでいる先進校から、道德教育の内容の重点化や非認知能力の育成に特徴のある学校を選出して開発・実践状況を実施し、学校主体の内容構成の成果と課題を分析する。

以上の研究成果を学会等で中間発表するとともに、国内外の学会における協議を通じて道德教育研究者らの意見集約を行い、道德教育の内容構成について複数の試案を開発する。

### 4. 研究成果

本研究の実施途上で発生した新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により、当初の研究計画は大きく修正せざるをえなくなった。具体的には、上掲「研究の方法」で企画していた(2)道德教育カリキュラムの内容構成とその開発プロセスに関する国際比較は、諸外国への訪問調査が困難となったため、国内で入手可能な資料を分析するに留めざるをえなかった。また、(3)学校における道德教育のカリキュラム・マネジメントに関する実践的研究についても、国内の小中学校の実態調査が困難となった。さらに、本研究では、内容構成の選択肢について、国内外の道德教育研究者との協同研究と国内外学会での発表、そのレビューに基づく検討を予定していたが、いずれの計画も中止することとなった。

以上の制限下で当初の研究方法を見直し、本研究では(1)道德教育カリキュラムの内容構成原理に関する理論・文献研究に焦点化して内容構成に係る課題の抽出に努めるとともに、(2)(3)については研究期間の延長を申請して情勢の好転後に再開することとした。しかし、実態調査と協議を予定していたオーストラリアとシンガポールへの訪問調査が研究期間中に実施できなかったため研究費の一部を返還し、主として理論研究・歴史研究の研究成果を取りまとめた。

#### (1) 我が国の道德教育史における内容構成の変遷とその背景

・学習指導要領の「内容」に示された項目の変遷

1958年版以降、新たに加えられた項目は、「畏敬の念」(ただし、小学校の1958年版には「崇高なものを尊び」の表現がある)、「よりよく生きる喜び」(小学校2017年版、中学校1989年版以降)のみで、いずれも「自然や崇高なもの」に関わる内容である(なお、「尊敬・感謝」のように、既存の内容が別の学校・学年段階に新設された項目や一つの内容に示されたものを分割し

たり逆に統合したりした内容項目は複数ある)。

逆に、過去に示されていて削除された内容には、「合理的な思考・判断」(小)・「建設的に批判する態度」(中)(1958年版)、「合理的な思考」(小)「理性的判断」(中)(1969年版)、「男女の正しい理解(健全な異性観)」(中)がある。「男女の正しい理解」は「信頼、友情」に統合されていることから、削除されたのは、思考や判断に関わる内容だけである。

道徳教育の内容項目は、1958年版作成以降、殆ど変更されていないことが確認できた。半世紀を超えて内容項目の見直しが殆どなされていないこと、その中で、思考や判断に関わる内容だけが削除されている点は今後の内容構成を見直す上で課題として注目すべきである。特に、現行学習指導要領では、「思考力・判断力・表現力等」が育成を目指す資質・能力の三つの柱として他教科等の目標や内容に明示的に位置付けられていることから、道徳教育の内容に思考や判断をどう位置付けるかが重要な課題であることが明らかとなった。

#### ・「内容」の重点化に関する学校の実態

国内における新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、学校に対する質問紙調査が実施できなかったため、文部科学省や国立教育政策研究所、東京学芸大学等が過去に実施した調査から、学校における道徳の内容の重点化の傾向を分析した。

一連の調査から、発達の段階を考慮した重点化が一定程度実施されていることが確認された。道徳教育の「内容」に関する質問が含まれていた文部省調査(2000)によれば、小学校低学年では「基本的な生活習慣」、「規則の尊重」、中学年では「思いやり」、「生命尊重」、高学年では、これらに加えて、「向上心」、「集団における役割や責任」に関する内容が重点的に指導されていた。中学校では、第一学年で「節度ある生活」、「集団における役割や責任」、第二学年では、「生命尊重」、「自律的精神」、第三学年では「勤労」や「社会貢献」が加わっている。この調査とほぼ同時期(1994・5年度)に国立教育研究所が実施した教員調査(8都県の学校から抽出)でも、教員が重点を置いて指導している項目は、ほとんどの学年段階で、「思いやり」、「友情」、「生命尊重」、「社会的役割」であった(国立教育研究所1997)。同調査では、教師が「指導困難」と感じる内容について、「家庭愛」、「畏敬の念」、「国際理解」、「愛国心」などが挙げられている。

1998年版以降の学習指導要領では各学年段階で重点的に指導する項目が示されているが、「国際理解」のように、ほとんどの学校・学年段階で重点とされない項目がある一方で、「思いやり」や「生命尊重」のように、複数の学年段階で繰り返し重点とされる項目もあった。

#### ・「内容」の関連付けについて

学習指導要領に挙げられた各内容の関連性については、学習指導要領本文だけでなく、『指導書』・『解説』でも示されてきたが、過去に開発された教材や各学校が作成する年間指計画を調査すると、実際の指導において内容の関連性がほとんど意識されていない実態が確認できた。例えば、過去に教科書に掲載された全教材のうち、複数の内容項目を主題とする教材は、1本のみ(平成29年検定・中学校三年・「郷土の伝統と文化の尊重」と「自然愛護」)であった。

#### ・内容の構造化について

ウィギンズらは、内容を相互に関連性のない観念として学習することの弊害を指摘し、学習内容から主要な概念を抽出し、その下で様々な知識の統合を可能にするカリキュラム開発を提起した。具体的には、知の構造を「事實的知識や個別的スキル」「転移可能な概念や複雑なプロセス」「原理や一般化に関する永続的理解」の三者に階層化するとともに、これらの学習において特に重要とされる中核的な概念を「ビッグアイデア(重大な観念)」と位置付けた。ウィギンズの定義によれば、ビッグアイデアとは、学習者に深い理解をもたらすカリキュラム設計において、カリキュラム、指導、評価の焦点として役立つような、「核となる概念、原理、理論および

プロセス」(Wiggins & MacTighe, 2005: 338)である。知の構造自体にスキルやプロセスが含まれていることから、ウィギンズらの提起したビッグアイデアには、知識だけでなく、問題解決の方略やそのプロセスに係る態度や価値も含まれることがわかった。

シンガポールの道德教育(人格・市民性教育)では、このビッグアイデアの考え方を活かしたカリキュラム開発が行われている。本研究では、同カリキュラムを参考に、道德教育におけるビッグアイデアを、道德的な問題や事象を多面的・多角的に考え、現実の道德的問題に向き合うときに重要な役割を担う概念・観念(内容に関するビッグアイデア)、問題解決のプロセスに関わる思考や実践のスキル(プロセスに関するビッグアイデア)、さらに、道德という学習領域の特性(「道德を学ぶとはどういうことか」等)に関わる問い、として整理した。

#### 徳倫理学の研究動向

徳倫理学のいわば第一世代(アンスコム、フット、マッキンタイア、テイラーら)は、伝統的な倫理学のアプローチを批判し、人の「行為」ではなく「性格」に注目すべきであると主張し、「徳」を「人の持つ望ましい性格」と位置付けた。そのため、1980年代頃までの徳倫理学は、当時アメリカで復権した character education と同地平で語られる傾向があった。「正しい行為」を「有徳な(性格の)人」の行為とみなす黎明期の徳倫理学的アプローチでは、「有徳な人」の特性である道德的諸価値を内容とする現行の道德教育を超える視点は導かれなかった。しかしその後、複数の研究者(アナス、ラッセル、スノウら)が、アリストテレスに依拠して実践的知性(フロネーシス)の意義やその発達に注目したことで、徳倫理学に基づく道德教育論に新たな可能性が生まれることとなった。本研究では、この現代徳倫理学の新たな知見に注目し、道德教育の内容である諸徳と実践的知性との関係を検討した。

諸徳の調和的な全体としての Unity of Virtue (徳の一性・統合)は、徳倫理学の要諦というべき概念であったが、現代徳倫理学はこの概念を実践的知性の下で再構築しようとしている。一連の試みによって、現実生活において諸徳の統合をもたらす実践的知性が、諸徳の多様な広がりや序列したり構造化したりするのではなく、現実の場面でその都度統合しようとするものであること、諸徳の対立を含む様々なジレンマ・問題状況の中で選択・意志決定を繰り返す学習によって発達するものであること、が示されている。この理論を背景に、学校の道德教育では、諸徳の観念的学習に留まらず、諸徳を関連づけた実践的な問題解決学習が要請されることを確認した。

今後は、カリキュラム研究や徳倫理学の理論研究から得られた知見に基づいて、現行学習指導要領で示されている内容について、実践的知性の育成を中核としつつ、内容の関連性や学校における重点化の実態を反映した内容構成の試案を複数作成し、それらの妥当性を検証する必要がある。新型コロナウイルス感染拡大の影響により、実証的研究及び諸外国の研究者との協働によるカリキュラム・フレームワークの検討が本研究期間では実施できなかった。これらの検討は今後の研究課題としたい。

#### 引用文献

国立教育研究所(1997)『道德教育カリキュラムの改善に関する総合的研究:小学校・中学校調査報告書』

文部省初等中等教育局(2000)『道德教育推進状況調査報告書』。

Wiggins, G. P., & MacTighe, J. (2005). *Understanding by design*. (2nd Expanded ed.) Alexandria, Va: Association for Supervision and Curriculum Development.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 西野真由美	4. 巻 71
2. 論文標題 現代徳倫理学における徳の一性：実践的知性と徳の多様性をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 倫理学年報	6. 最初と最後の頁 203-217
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西野真由美	4. 巻 30
2. 論文標題 人間性の育成に向けた学校主体のカリキュラム開発の可能性：研究開発学校における実践研究からの示唆	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 カリキュラム研究	6. 最初と最後の頁 29-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 西野真由美
2. 発表標題 徳と実践をつなぐ力を育てる道徳科の学び
3. 学会等名 日本道徳教育学会第96回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Helena Meyer-Knapp, Mayumi Nishino
2. 発表標題 Japanese moral education: A Framework for the Nation's Covid 19 Response
3. 学会等名 Association for Moral Education
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 NISHINO Mayumi
2. 発表標題 Moral Education for Developing a More Deliberative Culture in Schools
3. 学会等名 The Asia-Pacific Network for Moral Education (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 JamaI S. Al-Suwaidi, Farouk Hamada, Fatma Ghanem Al Marri, Najwa Mohammed Al-Hosani, Maosen Li, Nishino Mayumi, Inkeri Rissanen	4. 発行年 2020年
2. 出版社 The Emirates Center for Strategic Studies and Research	5. 総ページ数 227
3. 書名 Schools and moral education. Toward an education system that consolidates values in society	

1. 著者名 編著者：荒木 寿友、藤澤 文 共著者：西野真由美（第1章執筆）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 道徳教育はこうすれば もっと おもしろい	

1. 著者名 西野真由美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 NHK出版	5. 総ページ数 278
3. 書名 道徳教育の理念と実践	

1. 著者名 日本道徳教育学会全集編集委員会、柳沼 良太、行安 茂、西野 真由美、林 泰成	4. 発行年 2021年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 274
3. 書名 諸外国の道徳教育の動向と展望	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 The Asia-Pacific Network for Moral Education 13th Annual Conference	開催年 2019年～2019年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------